

目をあけたとき、クワールレンは、その寝台の質感と、包む毛布の重み、そして、美しい朝の光に、これでもかと感謝した。

生きている。

起き上がると、みんなそれぞれの寝台で寝ていた。チャルーだけは床に転がりおちていたが、それでも、誰一人欠けることなく、朝を迎えられたのだ。

〈目〉は、こなかったのだ。

クワールレンは、声を上げて笑った。マウリンが起きた。彼女も、クワールレンと目が合うと、けたけた笑い出した。

二人の笑い声は、みんなを起こした。

彼らは、寝ぼけまなこで、髪の毛もぐちゃぐちゃのまま、笑い通した。

お腹が減った。

相変わらず、春にしては寒すぎたが、空を覆う灰色の雲間からは黄色い朝日が差し込み、昨日より明るさを帯びていた。

「おはよう！」

起きたら店の方に来てちょうだい！ 一緒に朝ご飯を食べましょ！

注意！ 小道はすごく滑るから気をつけて。お尻が割れちゃうかも！

リトウアーラ

扉には、そう書かれた紙が鉋で留めてあり、クワーレンたちはさっそく『顔寄せ亭』へむかった。

「もともと尻は割れているのにな」

チャルーは自分の尻を触りながら、残雪を踏んだ。雪掻きをした小道は、たしかにリトウアーラの言う通り、滑りやすくなっていた。

みんなで手を取り合って、裏口から店に入ると、客の姿はなく、先日の席に、リトウアーラが座っていた。

「おはよう！」

彼女は、ぱっと笑みを浮かべて立ち上がった。今日は、枝豆色の毛糸服を着ている。

「よく眠れた？ さ、席に座って。いまプエツァーが朝食を作っているから！」

昨日と同じ席にみんなは座ったが、エネーリスだけは立っていた。

クワーレンは、彼女がなにを考えているか分かった。

「ドナウト師は……？」 彼女は言った。

リトゥアールは頷き、「まあ、座りなさいな。話してあげるから」と、彼女を促した。

「あなたたちの師の件だけ……」

全員が座るや、リトゥアールは彼らに顔を寄せた。見習いたちも、顔を寄せた。

「彼は、仕事が終わらなくて、ここで村回りの引率を、辞退したわ」

クワーレンたちは、息を呑んだ。

「ごめんなさい。同じ師の人として謝るわ。あなたたちの問題ではないのよ。あなたたちより他の仕事を優先してしまったのは悪いことだけど、許してね。本当にごめんなさい」

「あなたが謝ることじゃないよ」クワーレンは言った。

「そうだよ！ ドナウト師が悪いよ！」とマウリン。

「彼は、あなたたちに心配かけなくなかったのよ。……ということで、今後のこととんだけど……」

「あなたが率いてくれるの？」エネーリスがおずおずと期待をこめて言った。

「いいえ、私はできないわ！ 村回りを引き継ぐときは、前者、つまり、ドナウト師が指名した者でないといけないの。あと、面倒くさい署名とか、引継ぎの打ち合わせとか、事前講習とかも受けてるアベドじゃないといけないっていう決まりもあるし、うんにやらかんにやら……。とにかく、すんなりいかない！

壁が盛りだくさんなのよ！」

「ええ〜つまんない」マウリンは口を尖らせた。

「だけど、ね！ ドナウト師は、かわりに、村回り修了書を置いていったの！」

リトウアーラは、ぴよいつと席を立てて厨房に行き、一枚の紙を持って戻って来た。

「これこれ。『1540年見習い 村回り修了書』。ほら、ここにドナウト師の署名もあるでしょ？ あ！ 朝食はもうすぐできるって！ ジャがいも汁と、イ

カの牛酪炒めと、アブシュよ！ 豚肉と牛肉のまぜまぜ肉団子、アブシュ！」

「やった、アブシュ！？ 俺の好物！」チャルーは拳を上げた。

「で、僕たちはどうなるの？」クワーレンは、気になって仕方なかった。

「ああ、そうね」

リトウアーラは、気を取り直して座った。

「ええとね、署名付き修了書があるということは、つまり、あなたたちは、村回りを終了したってことになってるの」

「ええ！？ そんなのあり！？」リリが叫んだ。

「まだ商の村とつくりの村、行ってないよ！ あと守りの村だって！」マウリンも席を立てた。

「でも、これを学舎に提出すれば、入舎許可が出ちゃうわけ。う〜！ 闇を感じ

るわね！」

「え〜！ あたし、商の村の商店街、めっちゃ楽しみにしてたのに！」マウリンは、ずどんと椅子に座った。

「それは、約束破りになるんじゃないの？」エネーリスが、肩をすぼめた。

「落ち着いて。納得いかない気持ちもわかるわ。けど、ドナウト師は後継者を選ばなかった。そして、ここには署名したのよ。ってことは、入舎しないことよりも、このまま続けて誰かさんが村回りを率いることの方が、法外なわけ」

「なにもかも中途半端ね、あのアベドは」リリは椅子の背にもたれ、腕を組んだ。「信頼できる者が、いなかったのかもしれないわ」リトウアラは意味深に呟いた。

プエツアーが朝食を運んできた。ほわほわした牛酪と、こんがり焼けたイカの匂いがやってくる。

料理を置きながら、プエツアーは、小さな目を、見習い、それからリトウアラに向けた。

「どうだ？ 説得できたかね？」

リトウアラより先に、少女たちが首を振った。クワーレンも、ドナウト師がどうなったかの方が知りたかった。

チャルーが言った。

「俺たち、巻き込まれたのに、お楽しみなしかよ」

だが、リトウアーラは、明るく言った。

「大丈夫よ！ 北熊ノールの学舎長がくしやちようには、あたしから事情を言っておくし、半年後には、あたしがちゃんと講習を受けて、立派に村回りの続きをしてあげるから！」

「ほんと!？」

全員、リトウアーラの方へに身を乗り出した。

「ええ、そう。ぜひ見てもらいたいものがあるの！ ペニヤッツ酒の製造所とか、特売古本屋とか、アスハリエイク骨董品店とか！ ……それで、どう？」

リトウアーラは、控えめにみんなの反応を伺った。

みんなは、顔を見合わせた。よくない訳がなかった。

彼らの頷きと微笑みに、リトウアーラとプエツアーも喜んだ。

「じゃあ、先に、北熊学舎ノールに入舎してくれる？ そのあいだ、あたしが村回りの講習を受けておくから」リトウアーラは言った。

「やったあ！ 今度こそ普通に村回りできるんだ！」

マウリンの言葉に、リリは咳払いした。

「お前、そういうのまじやめろよな！」

チャルーは注意したが、それが余計マウリンの失言を強調していることに気がついていなかった。クワーレンは、チャルーを小突いた。

だが、リトゥアーラとプエツアーは気づかず、ほっとしていた。

「よかったわ！ ああ、見習い村に戻ったら、晴れてあなたたちは北熊^{ノリス}学舎の見習いになるのね！ 段階すっ飛ばしてだけど。まあ、『風乗って来たる米は食っちゃまえ（ふとして舞い込んだ幸運は遠慮せず手にしてしまえ。というエイネーの

諺^{ことわざ}）』ってやつ？」

「料理が冷めちまうぞ。あったけえうちに食っちまいな。ほれほれ」

プエツアーの促しによって、彼らは目の前のことに戻り、美味しそうに湯気を立てるジャガイモ汁とイカの牛酪炒め、アブシユの肉団子に、たまらず手をつけた。

イカは、身がぷりぷりしていて、牛酪の風味がほどよく効いていた。アブシユの肉団子はあっさりとした胡椒味で、絶妙な塩加減の煮汁が口の中で肉をほろほろと溶かし、甘い肉汁と混ざり合って、とても美味しかった。

「どうした。刈り上げのぼうず？ 調子が悪いのか？」

プエツアーは、そのぶっとい指を、イムサに向けた。

イムサは、アブシユをちょっと齧っただけで手を止めていた。

「なにも。眠れなかったんです。昨日」

「ああ！ そうよね！ 知らないところで寝るのって、本当に疲れるのよ！」

リトゥアーラがアブシユを頬張りながら言った。

「見習い村に戻る前に、昼寝していてもいいわよ。もしかして、あなたの使った寝台って窓際の？ あそこ少し硬かったんじゃないかしら？ そうよ、今度は別のところで休んだらいいわよ。うまくいかなかったら、環境を変えるべし、ってね！　そういうばあなたち、お金持ってる？　よかったら、無料で運んでくれる獣の人の友人、呼んでこようか？　まあ、つかまえるまでに、ざっと三、四日かかるでしょうけど」

「あ、僕たち……」

クワーレンは、イムサを見た。だが、イムサは皿の上を見つめていた。

「僕たち、ちょうど見習い村までのお金を持っています。だから、今日でも帰ることができます」

「じゃあ、準備が整ったら、行くつもりなのね？」

リトゥアーラに問われ、クワーレンは、みんなを振り返った。彼らは、クワーレンの言葉を待っていた。

クワーレンは、代表して頷いた。

「はい。帰ります。あのう、お世話になりました」

「あらやだ、ご丁寧に！　ああ、でも、寂しくなっちゃうじゃない！」

リトゥアーラは、彼の肩を思いつき叩いた。クワーレンは危うくジャガイモ汁に顔を突っ込むところだった。リトゥアーラは、朗らかに笑った。

「またいつでもいらっしやいな。次は自家製ペニヤツツ酒を飲んでいって！」

「やれやれまったく。素晴らしい宣伝だ！」

プエツアーは頭を掻き掻き、尻を振って去っていった。

彼を見送ると、リトウアーラは小声で言った。

「ね、もしなにか、他のアベドに話せないような困ったことがあったら、いつでもいらっしやいな。力になるわ。ここは実際、そういう場所なの。アベド一人一人の権限を守る、表向きは小さな店、けど、結構重要な役割を担ってる。ある種の逃げ場所ね！ 料理を頼まなくても、相談には構わず来ていいわ。ええ、もちろん！」

見習いたちの顔は、強張った。

「注文しなくていいだと？ 変な店だな」アブシュを食べようとしたチャルールの手が止まった。

「そうよ。プエツアーの名のもとに、そういうことになってる。だから、あなたたちをかくまったんでしょう？」

リトウアーラは、意味ありげに微笑んだ。

「さあ、ジャガイモ汁が冷めちゃうわ！ 出発はいつ？ 確か鳥便とらぎんの時刻表があったはず……。プエツアー？ プエツアー！ 時刻表はどこに置いたっけ？

……え？ 雪で運行状況が変わってるかもって？」

彼女は席を立って行ってしまった。

みんなは、顔を見合わせた。ジャガイモ汁のついた顔に、様々な感情が浮かんだ。

クワールレンは、皿を見下ろした。輪っか状に切られたイカたちが、様々な角度を向いて重なっている。早く食べろ、イカは湯気をたててそう言っているようだった。

クワールレンは、まとめて匙で掬うと、口に入れた。

「大変！ 離れの同僚からの情報よ！ あと半マウオ（約三十分）で鳥便とりびんが出るって！」

リトウアーラが駆けて戻って来た。「臨時便らしいわ！ いまは雪が降っていないからって！」

見習いたちは、慌てて朝食をかつこんだ。

「マウリン、地の花ナスイーワ、残っているわよ！」リリが指摘した。

「ええ、嫌いなんだもん。はい、あげる」

彼女は、エネーリスの皿に置いた。エネーリスがぱくりと食べたものだから、リリは「それ、あり！？」と叫んだ。

「お前、食わねえなら俺がアブシユもらうぞ！」チャルーがイムサの皿に匙をのばした。

「おい、やめろ！」イムサは悲鳴を上げた。「俺が食うんだ。お前はクワールレンのをもらえ！」

「嫌だ！」クワールレンは大声で言い、さっと皿をわきへ寄せた。

見習いたちは、やんややんやと料理を片付けた。暖炉の炎が、自分も混ぜろとばかりに、ぱちつと爆ぜた。



火炎色の髪をなびかせ、魔導師アートウナは、魔導師の木からエイネーを見下ろした。

彼女がいるのは、自室の隣に作られている、外向きの小さな庭だった。幼い頃、ノウアに作ってもらったその庭は、魔法で永遠に青くそよぐ芝が敷かれており、木から伸びた枝が、絡まって柵を成していた。

芝の端っこには、解けた牛酪のような腰掛けがあった。ノウアが大昔に作ったものだったが、いつの時代も評判が悪く、結局はここに放置されている。

その座り心地の悪い椅子に腰かけながら、アートウナは、黒い松の森の向こうに見える、白い見習い村を眺めるのが好きだった。

その日は、松の森も、見習い村も、さらに遠くに見える、商の村も、すべて白

く染まっていた。ほのかな金色の朝日が、柔らかい灰の雲に滲んでいる。

腰掛けに布を何枚も敷き、斜めになりながら、アトウナは、厚手の布にくるまって、白湯を飲んだ。湯気の向こうに、真新しい太陽が輝く。弱々しく、けれど、たしかな予感を抱かせる光。まるで赤ん坊のようだ。

そこへ、青竜エラドルスが、きゃあきゃあ鳴いて、手すりに飛び上がった。彼の喉や胸は、寒さなどものともせず、煮立った鍋のように熱かった。

エラドルスは、猛火を吐きだした。青白いその炎は、魔導師の木で新星のように輝いた。

アトウナは、遠くに霞む見習い村を、指でつくった輪をとおして覗いた。白く光るその小さな村を、彼女はぐっと握った。人差し指はぐると渦を巻き、決して緩みはしなかった。